

峯野龍弘原作・小川政弘脚色

ノンフィクションドラマ

## 「愛ひとすじにー峯野龍弘物語ー」

峯野龍弘(10代、20代)

同ナレーション

父親

母

教会員(女性)

教会員(男性)

イントロ

アナウンサー/タイトル/聖書の言葉

<前篇>

映画館支配人

Mさん

<後編>

蒲田教会牧師

特別講師

倉持芳雄牧師

ラング宣教師

宗教幹部

日曜学校長

イエスの声

サタンの声

小出忍牧師

小原十三司牧師

篠原寮母

東裕之

小川政弘

荒木寛二

長岡絵里子

成田真美

荒木寛人

小川政弘

大橋めぐみ

飯島勅

大橋めぐみ

荒木寛二

荒木寛人

小川政弘

飯島勅

小川政弘

荒木寛人

小川政弘

荒木寛二

荒木寛二

飯島勅

長岡絵里子

## 【後編】

- イントロ 人生はドラマ、あなたが主人公です。この度も、「この指ドラマ館」によるこそ。
- アナウンサー お元気ですか？ 古いことわざに、「艱難、なんじを玉にす」という言葉があります。辞書によれば、“人間は苦勞・困難を乗り越えることによって、立派な人物になる“という意味ですが、そのような人生を歩んだ一人の日本人キリスト教伝道者をご紹介します。
- タイトル 峯野龍弘原作・小川政弘脚色  
ノンフィクションドラマ「愛ひとすじに—峯野龍弘物語—(後編)」
- 音楽
- アナウンサー 福音ネット伝道協力会がお贈りする、「この指とまれ」ノンフィクションドラマ。今回は、日本を代表するあるキリスト教伝道者の半生の物語です。孤独な主人公の心は、決して揺るがない永遠の真理を求めて、神のみ言葉、聖書に向けられていきました。彼はどのようにしてキリストにあるすばらしい人生を切り開いていったのでしょうか？ では、あなたに、ご自身と向き合いお考えいただくためにお贈りする真実のドラマ「愛ひとすじに—峯野龍弘物語」その後編、どうぞお聴きください。
- 音楽 (ブリッジからナレーションへ)
- アナウンサー **第6章 信徒時代**
- ナレーション 喜ばしい“愛のくさび打ち”はなおも続きました。朝夕読むみ言葉に、神の愛、キリストの愛を読み取り、私の信仰は、この愛の上に打ち立てられました。私は、一日も早く洗礼を受けたいという強い願いに駆られ、牧師の倉持芳雄先生に願い出しましたが、先生はこう言われました。
- 倉持牧師 峯野さん、受洗するためには十分な準備が必要です。あなたの真剣な願いはよく分かりますが、他の方々と同様に、もう少し時間をかけて準備をいたしましょう。
- ナレーション それでも、主に救われた私の喜びは、今にもほとぼしり出そうなほど抑えがたいものがありました。そんな私を、清水ヶ丘教会の協力宣教師であるエルンスト・ラングというドイツ人の先生が、巡回伝道の手伝いに連れ出してくれました。ところが、ある結核療養所の集会に行った時、ラング先生は、初めての私に、いきなり救いのあかしをするようにと言うのです。ためらっていると、先生はこう言われました。
- ラング宣教師 (宣教師なまりで。以下同じ) 峯野さん。あなたは、恐れてはいけません。あなたの、ホンモノの体験、あかししなければなりません。私、よく祈ります。聖霊、あなたを助けます。
- ナレーション 本当に、そのとおりでした。話し始めると、いつしか恐れが消え去り、平安と自由が与えられ、私のあかしを涙を流して聞いていた 60 歳近い

男性が、ラング先生のメッセージのあと、明白にイエス様への信仰を告白したのです。“聖霊、あなたを助けます。”この真理を身をもって体験した私は、そのあと、キリストの福音をあかしするとき、生来の人間嫌い、赤面症から完全に解放され、全く別人のようになりました。やがて、待望の受洗の日がやってきました。1960年（昭和35年）、6月5日のペンテコステ記念日でした。

教会員(女性) 峯野さん。本当によかったですね。さあ、これからは、イエス様に喜ばれるような信仰生活をしていきましょうね。

龍弘 はい、よろしくお願ひします。

教会員(男性) まず、聖書を毎日きちんと読むこと。礼拝を守ること。祈ること。そして、イエス様のことを、ご家族やお友達に話すこと。これらを忠実に守りながら、少しずつクリスチャンとして成長していくんですよ。

ナレーション こうして私は、倉持牧師、ラング宣教師、そして教会の先輩たちのご指導のもと、まるで生まれ変わったように、生活の隅々まで、主に喜ばれる生活を求めるようになりました。このような急激な変化に、両親が気づかないはずはありません。特に母は、そんな私を喜んでくれたばかりか、「息子をこれほどまでに変えてくれたキリスト様なら、私も信じよう」と言って、教会に通うようになりました。しかし問題は父でした。私の信仰に烈火のごとく怒り、ことごとく暴力や嫌がらせをしたのです。ただいま。

龍弘

父 (酔っ払って) おい、龍弘、お前、ヤソなんかにかぶれやがって。また教会に行ってきたな。そんな西洋かぶれの野郎は、こうしてやる!

ナレーション 見ると、父の手には黒光りするナタが握られているではありませんか。

龍弘 父さん、危ない、やめてよ。

父 やかましい! お前は親戚中の面汚しだ! 生かしてはおけん! うりゃ～～!

龍弘 主よ!

ナレーション 外に飛び出した私は、身の危険を感じ、4メートルもある土手を一気に駆け下りて、危うく難を逃れました。ある時は内側から鍵をかけて一晩中うちに入れてもらえず、中で必死にとりなす母の声を、胸がつぶれるような思いで聞いていました。被害は家族だけではありません。父は、息子の変化の張本人と思ったのでしょうか、真夜中に倉持牧師に電話を入れたのです。

効果音 (電話のベル。受話器を取り上げる音)

倉持牧師 もしもし、倉持ですが、どなたでしょうか?

父 (酔った声) お前が倉持かあ! この野郎、よくうちの息子をたぶらかしたな。ただではおかないぞ。これからいってお前を突き殺してやる!

ナレーション 後日、倉持牧師が苦笑して振り返るほど、先生には誠に申し訳ないこと

をしたのですが、父の迫害はまだあるのです。私が“聖書焼き討ち事件”と名付けたお話をしておきましょう。

ある日、夜遅く家に帰ってみると、父は例によって泥酔しており、家じゅうに物が散乱しています。そればかりか、私の部屋の勉強机はひっくり返され、書棚の本がほとんどなくなっていました。今の奥のお風呂場のほうから煙が漂い、目の前を、何やらつぶやきながら、手に数冊の私の本を抱えて、父がお風呂場に向かっていくではありませんか。

父（酔ってモノローグ） 龍弘め。こんなヤソの本を読むから、外国宗教なんぞにかぶれてしまうんだ。こんなものは、全部燃やしてやる！

ナレーション 父がお風呂場に入ると、もう風呂がまの周りは黒こげになった本の残骸の山でした。父は力任せに、手にした私の愛読の宗教書をビリビリ破ると、またマッチで火を付けました。

父 燃えろ！ 燃えてみんななくなっちまえ！ これであいつも目を覚ますだろうよ！

ナレーション 翌朝、父の出かけた後で、私は母と、荒れ果てた家の中と、風呂場の後始末にかかりました。

母 あ、龍弘、1冊だけ、燃えずに残ってるみたいだよ。

龍弘 え？ あ、ほんとだ、外は黒こげだけど、中はまだ残ってる！ 何の本だろう。……あ！

ナレーション 私は驚きました。それは、愛用の小型聖書でした。なんと不思議なことでしょう。ダニエル書のシャデラク、メシャク、アベデネゴのように、燃える炉の中にくべられながら、焼けなかったとは！ まことに、主は生きておられます。私は、大いに主への信頼と信仰を固くさせられましたが、不思議なことに、そんなことをした父を憎むどころか、この父のためにそれまでも増して、熱心に祈る思いが湧き出てきたのです。

龍弘 主よ、この父を救いたまえ。あなたの偉大なみ力をもって、父を救い出したまえ。

ナレーション その時、父をこれほど惑わしている偶像の神々に対する憎しみの思いが、猛然と湧き上がってきました。

龍弘（モノローグ） 父を救うには、父をがんじがらめにしている偽の神々を打ち砕くしかない。彼らの偶像が本当の神なら、彼らの信じあがめている本尊とやらを火の中から救ってみるがよい。いざ勝負せよ！

ナレーション 私は、仏壇に飛んでいき、彼らが恐れかすんでいる本尊とやらをそこから運び出し、風呂がまの中にくべ、火を放ちました。

龍弘（モノローグ） 燃える、燃える、見事に燃えるぞ。

ナレーション その夜、帰宅した父に私は言い放ちました。

龍弘 父さん、お帰りなさい。父さんに相談しないで申し訳なかったのですが、仏壇にあったご本尊とやらを風呂がまにくべて、燃やしてしまいましたよ。父さんがくべた僕の聖書は焼けずに残りましたが、ご本尊は数分で

灰になりました。

ナレーション 烈火のごとくに怒り出すのを覚悟していたのに、父は急に酔いも覚めたように青ざめ、おろおろしながらこう言いました。

父 お前は大変なことをしてくれた。たたりが恐ろしい。それに幹部たちになんと言っておわびしたらよいのか。わしは知らんぞ。この後始末は、お前がしろ。お前は親不孝者だ。親のご本尊様を焼き払ってしまうとは…。

ナレーション そう言われるまでもなく、私は自分でやるべきことを決めていました。主の力を目の当たりに見た私には、偶像を恐れる理由など、もはや何もなかったからです。私は父に代わって、その偶像の幹部たちに挨拶に行きました。すると、彼らの反応も、父と同様でした。

宗教幹部 (おろおろと) わ、私たちは知りませんよ。きっと、あなた方一家に恐ろしいたたりがあるでしょう。私たちは一切関知しませんから、お好きなようにしてください。

ナレーション その後 20 年以上たちましたが、もちろんたたりなど一切ありませんでした。それどころか、これを契機に、父はこの宗教を離れました。そして、その後 13 年あまりの戦いはあったものの、ついに両親とも救われ、家族全員クリスチャンになる日が来るのですが、それについては、またのちほどお話します。

聖書の言葉 主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。(使徒の働き 16:31)

## アナウンサー 第 7 章 献身への道

ナレーション 私の奉仕とあかしの生活は、日を追うごとに濃度を増していきました。この頃の私は、大学で法律の勉強をしていたため、将来は法曹界に入り、主のあかしを立て、この働きを媒介として救霊伝道の業に従事していけたらよいと思っていました。しかし受洗して半年を過ぎた頃、より強い霊的渴望が起こってきました。それは“聖霊の満たし”とも呼ばれる、聖潔=聖<sup>きよ</sup>めの経験への魂の渇きでした。そんな中で、私は日曜学校教師見習いに登用されました。これは、私自身の信仰が成長していくためのチャレンジでした。それから半年後、1961 年(昭和 36 年)が明けた頃、私は日曜学校校長から呼び出されました。

日曜学校長 峯野さん、新年度から、あなたを正規の教師として登用したいと思うのですが、それに先駆けて、今年を受難週<sup>うけんしゅう</sup>の早天祈祷会で奨励をしてみたいかがでしょう。まだしばらく期間もあるので、よく祈り、準備してごらんなさい。

龍弘 え？ 私が、ですか？ いや、でも私にはとても…。

日曜学校長 誰でも初めは戸惑いますよ。心配は要りません。祈って支援しますから、せいぜい励んでください。

ナレーション それまで、あんなに順調に進んできた私の魂の状態が、ここに至って、何か越えがたい大山にぶち当たったようにさえ思えてきました。すっかり平安を失った私は、自分に今何が必要かを、明白に知ることができました。それこそ、“聖霊の満たし”とか、“内住のキリスト”とか呼ばれる、深く徹底した宗教体験だったのです。それは主が私を粉々に打ち砕き、へりくだらせた上で、み名の栄光のために、私の全生活、全存在、全生涯をご自身のものとして全面的に所有し、お用いになろうとされたからです。

龍弘（祈り） ああ主よ、入信直後に、あかしをした時は、ラング先生の「聖霊、あなたを助けます」のお言葉で、あんなに平安のうちに話すことができたのに、今の私にはまったく力がありません。主よ、私を聖めてください。聖霊に満たしてください。もしも私がまだ気づいていない罪があり、そのために告白を完了していないならば、それを教えてください。

ナレーション それでも、主は何もお答えになりませんでした。

龍弘（祈り） 主よ、どうしたのでしょうか。何が問題なのでしょう？ 私は、今のままでは今朝の早天祈祷会にはどうしても行くことはできません。聖められなければならないと知りながら、聖められずに生き長らえることは、み名を汚します。どうぞ私を聖霊で満たし、聖めてください。さもなければ、みもとに召してください。

ナレーション 身も心も疲れ果て、いつしか机に伏して眠り込んだ私は、不思議な夢を見ました。誰かが、私を呼んでいます。

イエスの声 （エコー）我が子よ、我が子よ、なんじ、安かれ。

ナレーション 私は驚いて目を覚まし、辺りを見回しましたが、誰もいません。再び眠り込んでしまうと、夢とは思えない明白な声で、また目を覚まされました。こうして3度目の声を聞いた時、私はハッとしました。

龍弘（モノローグ）これは、主の声だ！ あの少年サムエルに語られたように、主イエス様が今、私を呼んでおられるのだ！

ナレーション その時、枯れ果てた古井戸のような心の中から、再び喜びの泉が湧き上がり始めました。その時、一つの聖書の言葉が、聞こえてきたのです。

聖書の言葉 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。（コリント人への手紙第一 6:19）

ナレーション 私は、なんという愚か者だったのでしょうか。今の今まで、自分がすでに神から受けた聖霊の宮であり、とうの昔に私自身のものではなく、内に住まれるキリストご自身の所有物であることを知らなかったのです。問題はここにありました。私は、“聖霊に満たされ、聖められた”という、何らかの外的確証や、心理的確証を得たいばかりに、具体的結果やしるしを求めるのに性急で、最も大切な本質的信仰そのものに欠けていたのです。そのことに思い至った時、私の魂に、このみ言葉が鳴り響いてき

ました。

聖書の言葉      しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。(ガラテヤ人への手紙 2:19-20)

龍弘 (モノローグ) ハレルヤ！ ハレルヤ！ 主よ、感謝します！

ナレーション      ついに、まったく勝利が来ました。ひたすら渴望していた聖め、聖霊による満たしが、今まさに私のうちに起こったのです。この苦しみの3日間は、あの十字架に付けられ、葬られたキリストと共に、まさに自己を十字架に付け、己に死んだ3日間でした。そして3日目の朝は、キリストと共によみがえった、記念すべき私の霊的復活の朝となったのです。早くも東の空が白み、美しい春の朝日が昇りかける中を、私は弾む心で教会に向かいました。そして教育館チャペルで、「カルバリの十字架」と題して約15分ばかりの奨励をしました。真剣なまなざしで聞いてくれる子供たち。語っているうちに、私の心に主の十字架の愛が強く迫ってくることを感じ、涙がこみ上げてきそうでした。1961年(昭和36年)3月31日の朝のことでした。

音楽      (ブリッジ)

ナレーション      こうして私の教会奉仕やあかしの活動は、ますます活発になりました。しかし、以前と決定的に異なっていることは、全く力みがなかったことです。そして、内住のキリストと聖霊の満たしが、私のすべての力の源泉となりました。このような私の変化を目の当たりにしたラング先生は、「主が伝道者になるよう導いておられるのでは？」と教えてくださいました。倉持先生に相談すると、先生はこう言われました。

倉持牧師      峯野さん、あなたの生涯に、主がそのようなみ心をお持ちなら、必ずそのことを明白に示してくださるでしょう。決して急いではなりません。今なすべきあなたの本分を、まじめに、忠実に果たしさえすれば、必ず主のみ心がはっきりしてきます。ですから今までどおり、法律家になって主のあかしをしていきたいと言っていたことを大切にして、日々歩みなさい。

ナレーション      そこで私は、心の中でこう祈りながら、主の導きを待っていました。

龍弘 (祈り)      主がお望みなら、私はなんでもしましょう。そして、何をどうしてしようと、私の生涯は全面的に主のものです。それゆえ、生きるにしても、死ぬにしても、ただみ名の栄光のためにのみ仕えます。

ナレーション      やがて暑い夏も半ばを過ぎた頃、書齋で昼寝をしていた時、私は不思議な夢を見ました。私はある絶海の孤島で、島の人々に熱心に伝道をしているのです。一体ここはどこだろうと思っていると、誰かが「八丈島」と言い、その瞬間、目が覚めました。私は、主が「八丈島で伝道せよ」と言われているのでは、と思い、島の地図や資料を買い求めて備えつつ、

まるでイザヤのようにこう祈りました。

龍弘（祈り） 私がここにおります。私を遣わしてください。

ナレーション するとサタンはこうささやきました。

サタンの声 （エコー） お前、バカなことをするな。秩序ある主が、学生の本分である勉学を放棄させて、こともあろうに、伝道者まがいの八丈島伝道に、お前を駆り出すと思うのか？ うぬぼれるのもほどほどにしろ。

ナレーション けれども私の決心は揺るぎませんでした。船は月に1度、第1火曜の夜に出航することになっていました。あと3日しかありません。私はその間に、短い伝道用の文書＝トラクトを買い求め、児童伝道用の紙芝居や、絵本、それにテントも一張り、調達しました。あとは食事代も、帰りの切符も、すべて主に任せました。

直前の日曜日に、私は初めてこの計画を、牧師とごく少数の同信の友に打ち明けました。

教会員（男性） 峯野兄弟、あなた、あの八丈島へ、独りで行くんですか?!

倉持牧師 また思い切ったものだ。あなたらしいね。いろいろ大変だと思うけど、主のお守りを祈ってますよ。

ナレーション こうして、そろそろ台風シーズンに入りそうな9月の初め、私は八丈島に向けて出発し、延々19時間余りかかって、島にたどり着きました。1か月余りにわたる八丈島伝道は、祝福に満ちたものでした。長い間、牧師がいなかった島のたった一つの教会が復興し始めたのも、この時でした。

伝道旅行から帰ると、私は将来の進路について、真剣に祈り始めました。

龍弘（祈り） 主よ、法律家としてあかしをすることと、伝道者になることと、あなたはどちらをお望みでしょうか？ 全てをあなたにお委ねしていますので、どうぞみ心を示してください！

ナレーション そんなある日、友人からチャールズ・フィニーの本を借りました。彼もまた、法律家として身を立てようとしていたにもかかわらず、突然召命を受けて、伝道者になったのです。そのくだりを読んだ時、私は全身全霊に強烈なインスピレーションを受けました。私は思わず主のみ前にひれ伏して祈りました。

龍弘（祈り） 主よ、信じます。今、信じます。私は今よりのち、直ちに直接伝道者となって、福音の宣教に携わるべく、お従いたします。

ナレーション 涙がとめどもなくあふれてきました。その時、私ははっきりと主のみ声を聞いたのです。

イエスの声 （エコー） わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。  
（マルコの福音書 1:17）

ナレーション うれしくて、うれしくて、図書館の外にそそくさと飛び出し、電車に飛び乗りましたが、帰宅するまで、あとからあとから流れ出る涙は止まりませんでした。1961年（昭和36年）の秋のことでした。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション 私は、両親に、神学校へ行きたいという思いを打ち明けました。その頃の父は、道楽も暴力もめっきり減ってはいいましたが、それを聞くと烈火のごとく激怒し、その晩は大酒を飲み、暴れました。

父 (酔って) この親不孝者めが！ なんのためにお前を大学にやったと思ってんだ！ そんなバカげた道に進む気なら、二度と再び家の敷居はまたぐな！

母 お父さん、そこまで言わなくても。龍弘は真剣なんですよ。どうかこの子の気持ちも…。

父 やかましい！ 何が「この子の気持ち」だ！ こんな恥さらしの息子を持った親の気持ちはどうなんだ！

ナレーション 怒った父は、私を力任せに追い出すと、中から鍵をかけてしまいました。中からは、いよいよ怒り狂った父が、なおもとりなす母を罵倒しながら殴る様子が聞こえてきます。たまらない思いで、庭の隅から夜空を見上げ、祈っていると、主のみ声が心に響きました。

イエスの声 (エコー) わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。(マタイの福音書 10:37-38)

ナレーション このみ言葉で、私は地上のどんな思いよりも、主のみ心こそ常に最善であることを改めて確信しました。それに、献身することは、両親の救いの先取りともなるのです。私の心は、主の平安に満たされました。その夜遅く、酔った父が寝静まるのを待って、私は母にそっと家に入れてもらいました。それから明け方まで、母と身の振り方を相談すると、「しっかりやるんだよ」と言う母の声に送り出されて、ラング先生のもとを訪れました。一切の事情を聞くと、ラング先生はこう言われました。

ラング宣教師 峯野さん、よく分かりました。全ては神様のご計画です。信じましょう。私は、あなたを助けましょう。

ナレーション それから約4か月余り、私はラング先生の家に住候をし、そこから大学に通い、最後の課題を終了する一方、残された時間は祈りと黙想と伝道と奉仕に充てました。気になっていた八丈島には、神様が待望の教師を遣わしてくださいました。全て、神様の最善のご計画でした。

ラング宣教師 峯野さん、あなた、これから、箱根に行くべきです。そこに、恵まれる集会、持たれます。行ってきなさい。

ナレーション それが、イギリスのケズィックに発祥したクリスチャン修養会の、日本における最初の大会、「ケズィック・コンベンション」で、以来私は、24年間、一度も欠か

さず出席を許されたばかりか、中央委員会の末席を汚す者となりました。この大会では、淀橋教会の小原十三司先生が、献金の奨励を始め、卓越した霊的指導力を奮っておられました。後年、この教会で先生の跡を継がせていただくことになるなどとは、夢にも思いませんでした。

さて、集会が進むうち、その献金の時間がやってきました。

龍弘(モノローグ) どうしよう。帰りの電車賃以外はお金を持ってない…。ラング先生が次のスケジュールを組んで僕の帰りを待ってるから、この電車賃をささげて歩いて帰るわけにもいかない。何かないかな。何か…。

ナレーション ポケットを探ると、未使用の切手が何枚か出てきました。

龍弘(モノローグ) よし、これをささげよう。神様は用いてくださるだろう。

ナレーション ところが、大会で、もう一度献金の時間があつたのです。もうほんとに、なんにもささげるものがありません。その時、ある考えが脳裏にひらめきました。

龍弘(モノローグ) そうだ、自分自身を、全身全霊を献金袋にささげればいんだ！

ナレーション 献金袋が回ってくると、私は「我ささぐ、今ささぐ、皆ささぐ！」と口の中で唱えながら、目に見えぬ“献身と献心”、身も心も全て主にささげたのでした。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション ケズィックが終わると、神学校入学の時期が、いよいよ迫ってきました。両親の賛成はまだ得られないまま、私は、倉持先生の母校でもある神戸の関西神学校に入学するため、先生から校長の沢村五郎先生に連絡していただいたのですが、時遅く、入学試験はもう終わっていました。がっかりしてどうすべきか考えていた4月中旬のある日、ラング先生のお呼びがかかりました。

ラング宣教師 峯野さん。あなたのお父さん、とうとうあなたの献身、許しました。でも神戸はいけません。遠すぎます。そこで、私、小出先生に話しました。あなた、すぐ行くべきです。その学校、神戸の塩谷と信仰全く同じです。さあ早く、行くべきです。

ナレーション あの父が入学を許したとは信じられませんでした。ともかくラング先生の「何々すべきです」には、いつも一種独特の権威が伴っており、絶対でした。私は、どこの神学校かも分からぬまま、東調布教会の小出忍先生を訪ねました。先生は、私の顔を見ると、単刀直入にこう言われました。

小出牧師 やあ、君が峯野君かね。ラング先生から委細は聞いている。君、小原先生に全てよく話しておいた。小原先生が待っているのだから、この書類を持ってすぐにそちらの方へ行きたまえ。

ナレーション 何がどうなっているのやら、「寝耳に水」ならぬ「起きている耳に栓」、「狐につままれて」どころか「神につままれて」、私は言われたとおり、小原十三司先生が牧しておられる大久保の淀橋教会に行きました。そこには、先生が校長をしている東京聖書学校もありました。それを知って、私は、初めてラング先生が「神戸の塩谷と全く同じ」と言われたのが、この神学校のことだと分かったので。

やがて出てきた小原先生は、こう言われました。

小原牧師 君が峯野君かね。委細は小出先生からよく聞いてある。君、明日から直ちにここに移ってきたまえ。荷物はできるだけ少なめにしてな。それでは待っている。ラング先生にもよろしく伝えてくれたまえ。

ナレーション 言われたとおり、ラング先生に経過を報告すると、先生は満足げにこう言われました。

ラング宣教師 峯野さん、よかったですね。神様のみ心です。私、明日、あなたを送ってゆきます。

ナレーション けれども、私の意思とは全く関係なしに、とんとん事が運ばれてしまったことに、私の心は晴れませんでした。自分の部屋に戻ると、私はみ前にぬかずき、一晩中祈り明かしました。

龍弘(祈り) 主よ、み心を教えてください。私は、あなたのみ心ならば、どこへでも参ります。私は、関西神学校と関わりの深いバックストン先生の書物で信仰を養われ、長い間、あの学校へ行くことがみ心と信じ、祈り備えてきたのです。そこをあきらめて、東京聖書学校に行くことが、本当にあなたのみ心なののでしょうか？

ナレーション 夜が白々と明ける頃、ついに主から一つのみ言葉が与えられました。

聖書の言葉 わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——主の御告げ——

天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。

そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。

まことに、あなたがたは喜びをもって出て行き、安らかに導かれて行く。  
(イザヤ 55:8-12)

ナレーション このみ言葉で、私は心を定めました。なぜ主が私の願ったのとは違う神学校への道を備えられたのかは分かりません。でも、今の私にとって、“なぜか”が大切なのではなく、“本当にみ心なのか”が重要なのです。私は祈りました。

龍弘(祈り) 主よ、今信じます。あなたの思いは正しく、あなたの道は高いのです。私はもう何一つ思い煩うことなく、東京聖書学校に参ります。

ナレーション すでに夜は明けていましたが、私の心も晴れ晴れとしていました。一晩祈り明かした椅子から立ち上がり、宣教師館の屋根裏部屋のブラインドを開け放つと、太陽の光と、新鮮な空気の匂いが、部屋いっぱいに入ってきました。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション こうして私は、東京聖書学校に入学しました。小原先生に言われるまでもなく、いとも身軽に、聖書と英語の辞書、布団一組、わずかな衣類をバッグに詰めて、ラング先生のオールド・フォードに乗っての神学校入りです。すでに新学

期がスタートして数日たった、1962年(昭和37年)4月12日のことでした。寮に入った直後、先輩の諸兄姉が私のために歓迎会を開いてくださいました。その時、寮母をしていた篠原さんが涙ながらにこう言ってくれました。

篠原寮母 神様は、なんとすばらしいお方でしょう。私の小さな祈りにもお応えくださいました。私は本年の入学者が、どこかにもう一人いると思えて仕方がなく、新学期が始まっても祈り続けていたのです。その一人とは、峯野さん、あなただったのですね。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション 最後に、両親の救いについて一言触れて、私のあかしを終わりにします。私が神学校に入ってから、母はよく教会に行くようになり、時には学校を訪ねてくるようになりました。

母 龍弘、勉強のほうはどうなの？

龍弘 ああ、母さん。必死で頑張ってるよ。将来、主に喜ばれる伝道者になれるようにね。父さんは、この頃、どう？

母 ええ、なんとか元気でやってるわ。お酒もだいぶ減ってね、以前のように暴れることもほとんどないから、ほっとしてる。この頃はね、会社の帰りに夕食の買い物をしてくれるんだよ。なんか、以前のお父さんを考えたら、信じられない変わりようだね。やっぱり、お前のおかげかね。

龍弘 いや、神様が少しずつ、父さんを変えてくれてるんだよ。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも、あなたの家族も救われます。」このみ言葉は真実だからね。

母 ああ、ほんとにそうなんだね。この間、お父さんの職場の人が寄られたんだけど、「息子が、キリスト教の牧師になるために、目下勉強中なんだ」と、いかにも満足げに、お父さん話したんだよ。私もびっくりするやら、うれしいやら…。

ナレーション やがて私は神学校を卒業し、最初の任地、杉並の桜ヶ丘教会に遣わされました。すると、それまで、教会には一度も来たことのなかった父が、こう言ったのです。

父 龍弘、しっかりやれよ。だが、母さんの話だと、お前の教会は、周りは林だし、古い一軒家で、掃除や手入れが要るそうじゃないか。せっかくお前が初めて働く教会なのに、汚れていちゃあ人も集まるまい。一つきれいにしてやるか。

ナレーション 私は心の中で、思わず「神様、感謝します！」と叫びました。こうして父は、次第に礼拝にも出席するようになりました。み言葉のお約束どおり、“神の救いの時”は、少しずつ近づいていたのです。それはまず、伝道2年目の春、私の結婚式の席上での、父の挨拶に表れました。

父 皆さん、私は長い間、息子の信仰に反対し、迫害し、神様を拒んできましたが、今日から私もクリスチャンになるため、新しく進んでまいります。息子たち共々、よろしくご指導、ご鞭撻むちください。

ナレーション この日以来、父は聖書をよく読み、横浜～東京間の距離をものともせず、足しげく礼拝に出席するようになりました。この頃には、すでに母の信仰はすっか

り整いつつありましたし、私は、次の任地である淀橋教会に移っていました。父は、まず喫煙を、そして飲酒の悪習慣を断ち切るために、祈りつつ必死で努力しました。何度も挫折しそうになりながらも、数年後、ついにこれらから完全に抜け出すことができました。

父にとって“最後の難関”は、以前関わったことのある女性たちへの謝罪と決別でした。父はだいぶ苦しんだようでしたが、これも徹底的に悔い改めて実行し、洗礼を受けて新しい人生へ踏み出す道を選び取りました。

龍弘 父さん。よくここまで頑張りましたね。では、いよいよ、母さんと一緒に晴れてバプテスマ＝洗礼を受けられますね。

母 お父さん。お父さんの女道楽には、ほんとに泣かされたけど、でも、これでほんとに神様の前に、二人で新しい人生が歩めますね。ご一緒に、龍弘から…、いえ、峯野先生から、洗礼にあずかりましょう。

父 ああ。

ナレーション ところが、いよいよ明日は洗礼という前の日のことでした。

父 龍弘、すまないが、私の洗礼は、あと数日待ってくれ。母さん、一足先に受けてくれないか。

龍弘 父さん、どうしたんです、いったい？

父 まだ謝罪してない人が一人いるんだ。このまま洗礼を受けるのは、なんだか神様に申し訳ない。その人にきちんと謝って、赦してもらってからにしたいんだ。

ナレーション 愛する両親と一緒に洗礼を受けられないのはちょっと残念でしたが、でもこれは、聖霊の神様が、父の心の中に確かに働いておられる証拠だと思い、私は喜んで父の申し出を受け入れました。

こうして、まず母が受洗し、その1週間後の1971年(昭和46年)4月11日のイースターに、父も受洗の恵みにあずかりました。私が入信して、父の救いのために祈り始めてから、13年の年月が流れていました。かつては呪われていたような我が家に、大いなる神の祝福の日がやってきました。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも、あなたの家族も救われます。」このみ言葉は今こそ我が家に成就したのです。それは、人間の罪の縮図のような私たちの家族を、どんなときにも変わることなく、“愛ひとすじに”導いてくださった神様の、驚くべき恵みでした。主のみ名は褒むべきかな。ハレルヤ！

<完>